

Title           ベルクソンにおける知覚の諸相  
Sub Title       Aspects divers de la perception chez Bergson  
Author          岡嶋, 隆佑(Okajima, Ryusuke)  
Publisher       三田哲學會  
Publication     2015  
year  
Jtitle          哲學 No.135 (2015. 3) ,p.59- 89  
JaLC DOI  
Abstract

## ベルクソンにおける知覚の諸相

— 岡 嶋 隆 佑\* —

**Aspects divers de la perception chez Bergson***Ryusuke OKAJIMA*

D'où regardez-vous des objets extérieurs? Si quelqu'un nous pose cette question brusquement, nous répondrons tout simplement: « D'ici ». Cela va de soi. Cependant, dans *Matière et mémoire* de Bergson, nous pouvons trouver certaines perspectives qui dévient de ce point de vue ordinaire. Quand l'auteur parle d'ensemble d'images, de quelle perspective s'agit-il? Ou encore, quand il emploie l'expression « image que j'appelle mon corps », quel est le statut de ce « JE »? Ou enfin, quand il dit que « les objets extérieurs sont perçus par moi où ils sont, en eux et non pas en moi », que signifie « en eux »? L'existence de ces diverses perspectives devient rapidement énigmatique d'autant plus qu'il les appelle « sens commun ». Selon notre hypothèse, le sens commun de Bergson ne correspond pas exactement à ce que nous appelons ainsi au sens quotidien du terme. Dans cet article, nous allons défendre cette hypothèse, et mettre au clair les perspectives bergsoniennes en dissociant en différents degrés les rapports de la perception et de l'affection.

---

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程（哲学）：日本学術振興会特別研究員（DC1）

## はじめに<sup>1</sup>

日常生活において物を見るとき、私たちはそれをどこから見ているだろうか。いきなりこのように問われれば、多くの人、戸惑いつつも、自分がいる場所の周囲を漠然と示しながら、「ここから」と答えるのではないだろうか。あるいはまた、哲学に馴染みのある人であれば——『感覚の分析』でマッハが描いた絵を想起して——自分の目の奥の方を指差しつつ、同じく「ここから」と答えるかもしれない。だが、以下で扱うベルクソン『物質と記憶』は、そうしたものとは別の、奇妙な答えを用意している。

……外的諸対象は、私によって、それらがある場所において、私の内ではなくそれら自身の内において知覚される…… (MM58<sup>2</sup>)。

奇妙なのは次の点である。通常、外的対象という概念は、それを見る主体との間の隔たりを含意する。冒頭の問いに対し、「ここから」と答えるとき、対象のある場所という意味での「そこ」と身体のある場所としての「ここ」との間に想定されるあの隔たりである。だが上の引用部においては、知覚の起点そのものが、対象のある場所に定位されており、一見したところ、そうした主客の隔たりが失われているかのように思われる。このことは対象という概念そのものに矛盾するのではないだろうか——『物質と記憶』のテキストに初めて触れたとき感じられる違和感を述べるとすれば、このようなものになるだろう<sup>3</sup>。

しかし驚くべきことにベルクソン自身は、こうした見方を常識的だ、と考えているのである。『物質と記憶』出版の翌年、そうした見解に疑問を投げかけたルシャラスに対し、ベルクソンはこう答えている。

……そうした〔視覚しか持たない〕存在は、自分自身を、〔光点〕Pにおいて、自分の身体が占めるのと全く同様の資格において知覚するのではないでしょ

うか。私の意見では、私たちは、私たちの知覚が拡がっている各々の点に実際に存在しているのです。少なくともこれが、私の考えを表現する最も自然な仕方です（M410-411）。

結論から述べてしまえば、ベルクソンの語る「常識」は、そもそも語の通常の意味での常識と一致しない<sup>4</sup>。だがそうだとし、上に示される非常識的な、こう言ってよければ、異常な知覚経験についての記述は、ベルクソン哲学の枠組みにおいてどのように説明されるのだろうか。これが本稿が扱う第一の問いである。

この認識論的な問いは、ベルクソンの形而上学と直接結び付いている。というのも、『物質と記憶』における「常識」は、哲学的洗練を経ていない素朴な直感として拒否されるものではなく、物質についての形而上学が語られるための出発点という重要な身分を持っているからだ。では、彼にとっては常識的とされる上述の異常知覚は、形而上学的にはどのような意義を持ちうるのだろうか。これが本稿が立てる二つ目の問いである。

これら二つの問いに一定の応答をするため、以下の順で議論を行いたい。まず、異常な知覚についての記述がみられる第一章を含め、『物質と記憶』の全体が依拠している方法について、本稿の見解を提示する（第1節）。その上で、問題となる異常な知覚の光景にいくつかの特徴付けを行い（第2節）、それを説明するための予備的考察として、ベルクソンの知覚論を詳細に検討する（第3節）。その成果を用いて異常知覚の発生機序を解明し（第4節）、最後に、その身分について述べる。

## 1 『物質と記憶』の方法論

『物質と記憶』は、最初に方法論を提示し、それにしたがって議論を進めるという仕方では書かれていない。というのも、ベルクソンはその第四章で、自らの方法論の「一般的原則」を語り、それを「以前の著作〔『試

論』で用いただけでなく、この著作においても「暗黙裏に用いてきた」(MM203, 強調引用者)と述べているからだ。まずは第四章前半部<sup>5</sup>から、その原則を引用しておこう。

しかしまだ、挑むべき最後の企てが残されている。それは、経験をその源泉にまで求めに行くこと、というよりもむしろ、経験が私たちの有用性の方へと向きを変え、真に人間的な経験となる、その決定的な曲がり角 (*tournant*) を越えたところまで、経験を求めに行くことだろう。(MM205)。

思考だけでなく知覚に至るまで、それらの習慣を捨て去るのはそれだけですでに困難なことである。しかもそれはまだ為すべきことの消極的な部分 (*partie négative*) にすぎない。このことを為し遂げたとき、つまり私たちが経験の曲がり角と呼んだものに身を置き (*quand on s'est placé à ce que nous appelions le tournant de l'expérience*)、直接的なものから有用なものへの移行を照らしつつ私たちの人間的経験の黎明をつげる曙光 (*naissante lueur*) を利用したとき、さらに残される課題は、そのようにして現実の曲線 (*courbe réelle*) から私たちが見出す無限小の要素によって、その背後の暗がりには伸びて行く曲線そのものの形を再構成することである。この意味で、私たちが解するような哲学者の仕事は、微分から出発して関数を決定する数学者のそれとよく似ている。哲学的研究の最終段階は、紛れもない積分の努力なのである (MM206)。

「暗黙裏に用いてきた」と言われているのは、微分の比喩によって示される、方法の「消極的な部分」である (積分の比喩が示す積極的部分は、第四章のこの引用の後に続く議論と対応している)。重要な箇所であるため、細かくみていこう。

まず、文脈から、「経験の曲がり角」の先に想定される「源泉」は「物

質」のことでありと考えられる。さらにその「曲がり角」の比喩は、後半部にみられる微積分の比喩に対応していることに注意しよう。すなわち、曲がり角から源泉に至るまでの「現実の曲線」は「関数」と、また「直接的なもの」はその関数の「微分」と、さらに「曲がり角」そのものは微分が行われる関数上の「点」と、それぞれ対応している。このことを踏まえれば、方法の消極的ステップの目的が、まずもって、「直接的なもの」を見出すことにあることがわかるだろう。その内実を検討する前に、さらに三点指摘しておこう。

第一に、私たちが現実の経験において、「曲がり角」を超えてその源泉としての物質へ到達することはできないという点。というのも、私たちが「外的知覚の根本的条件から解放されること」(MM208)は実際には不可能であるから。

また第二に、私たちの経験は、「私たちの精神の根本的な構造」ではなく、「身体の機能と下等な欲求」に由来する「偶然的な形式」に「相対的」であるに過ぎない、という点。ここで「偶然的な形式」とは、第一批判における時間と空間のように、物自体と経験との間に断絶を導入せざるをえないような形式ではなく、ちょうど粘土から彫像を形作る場合と同じように<sup>6</sup>、その介入の前後で質料的同一性が確保される、そのような形式である。したがって、そうした形式が導入するものを実際の経験において特定することができれば、私たちは感性的な経験を離れることなく、「実在との接触」が得られることになる——これが、微分の比喩によって語られていることである。

そして第三に、数学者が関数を操作できなければならないのと同様に、哲学者は現実の経験について反省できるのでなければならない。という点。言い換えれば、「経験の曲がり角」そのものと、そこに立つ「人 (on)」は区別されなければならない。これはちょうど、この方法の「意識の問題」へ適用に際して、「私たちが行動するときの持続」——実際の経験

——が「行動の本性についての思索」から区別されていたことに相当すると言えるだろう。「物質の問題」への適用においてもまた、「この方法の技法は、まずもって、日常的ないし功利的な観点と真の認識の観点とを区別すること」にあるのだ（MM207-208）。

以上を踏まえた上で、鍵となる「直接的なもの」について、先の引用部から読み取れる限りで一定の理解を与えておこう。そのためには、「直接的なものから有用なものへの移行」のプロセスにおいて何が付け加えられるのかを明らかにし、それを日常的な経験から——反省によって——排除すれば良いだろう。このとき重要になるのは、引用部で設けられている「思考」と「知覚」の区分である。これらが順に、「言葉（*mots*）」と「対象（*objets*）」に対応すること（MM203）、またすでに確認したとおり「知覚」の「根本的条件」からの解放は望めないことを合わせて考えれば、このプロセスで問題となっているのは、まずもって、「知性」による「言語」の介入であることがわかるだろう。ところで、『物質と記憶』の認識論の枠組みにおいて言語一般の使用を可能にしているのは、現在の「直接的知覚（*perception immédiate*）」への過去の「記憶（*souvenir*）」の投射である（MM115）。そして実際ベルクソンは、そうした記憶の働きの有無によって「人間」と「動物」を区分している（MM200）。とすれば、移行のプロセスの開始点に設定される「直接的なもの」は、さしあたり、私たちの実際の経験から、この意味での<sup>7</sup>「記憶を排した水準」として理解できるだろう。

では、本稿が扱う『物質と記憶』の第一章にとって、以上のような方法の「消極的部分」はどう効いているのだろうか。

この点について考えるにあたって重要になるのが、ベルクソンが語る「常識」の身分である。同書第四章において、この概念は、私たちの習慣に相対的なものとして、否定的なニュアンスのもとで用いられている<sup>8</sup>。しかし第一章では、あたかも常識の素朴な立場を擁護するかのよう議論

が展開される。それゆえ、一見すると、常識の身分をめぐるベルクソンの記述に、二つの章の間で齟齬が生じているように思われるのである。この困難の解消を図るため、以下では、第四章における「経験の曲がり角」の概念と、第一章における「常識」の概念を対応付けてみたい。つまり、「原則」の消極的ステップにおいて、「曲がり角」そのものがそこに立って反省する「哲学者」から区別されたのと同様に、第一章において常識的な実在論観が提示されるとき、それを記述する哲学者の審級は常識よりも高次の水準にある、と考えることにしよう<sup>9</sup>。

さて、このような解釈をとるとき問題になるものこそ、冒頭にみた異常知覚の存在である。というのも、ベルクソンは、そうした知覚の光景が、まさしく常識の観点の所与だと述べているからだ。『物質と記憶』は常識に対して反省的な視点を導入してはいるが、その常識自体が、語の通常の意味でのそれではない、という振じれた構造を持っているのである。節を改めて、その内実をみていきたい。

## 2 異常知覚の光景

問題となるテキストを抜き出していこう。以下にみるさまざまな視点は、日常的な知覚における自己中心性を前提としないという点を共有するが、大別して三つの異なる仕方で特徴付けることができる。

まず始めに、ベルクソンの知覚論に頻出の「私は～を…と呼ぶ(j'appelle…～)」という表現に注目したい。

私が私の身体と呼ぶこの特殊なイメージ…… (MM13)<sup>10</sup>。

私はイメージの総体を物質と呼び、同じイメージがある特定のイメージ、すなわち私の身体の可能的行動に関係付けられたとき、それらを物質の知覚と呼ぶ (MM17)。

## ベルクソンにおける知覚の諸相

ここに私が宇宙についての私の知覚と呼ぶイマージュのシステムがあり、このシステムは、ある特権的なイマージュ、すなわち私の身体のわずかな変化にもその全体がごとごとく変転する。……その一方、ここに同じイマージュではあるが、各々が自らに関係付けられたイマージュがある……これは私が宇宙と呼ぶものだ (MM20)。

ここにはさまざまな対象を一挙に俯瞰する視点があると言ってよいだろう<sup>11</sup>。とりわけ最後の引用にみられるような、宇宙とその知覚をともに(自己の身体も含めて)イマージュ同士の関係付けのシステムとして定義するといった発想は、つねに一定のパースペクティブを持たざるをえない日常的な視点からは出て来ないように思われる。

次に、冒頭で取り上げた、対象没入的な視点の存在を確認しよう。知覚の対象(物体ないし身体)と主体との間に一定の距離が確保されている俯瞰的な視点とは反対に、以下に引くテキストからは、そうした距離を欠き、知覚における主客が合致してしまうような視点の存在が示唆される。

[光点] P のイマージュが形成され、知覚されるのは、他のどこでもなく、まさしく P の内において (en P) である (MM41)。

……いかにしてこの対象のイマージュが対象とともに対象の内 (en lui [objet]) 与えられるのかは非常に良くわかる…… (MM42)。

……外的諸対象は、私によって、それらがある場所 (où ils sont) において、私の内ではなくそれら自身の内において (en eux et non pas en moi) 知覚されている…… (MM58)。

……そうした[視覚しか持たない]存在は、自分自身を、P において (en P)。

自分の身体が占めるのと全く同様の資格において (au même titre qu'au point occupé par son corps) 知覚するのではないでしょうか (M411).

以上に見られる没入的な視点においては、通常の知覚における主客の隔たりが欠けているとはいえ、その対象は一つに限定・個別化されていると言って良いだろう。だが以下の記述は、そうした限定すら持たず、むしろ世界全体へと拡散していってしまうような事態を示唆するように思われる。

私の意見では、私たちは、私たちの知覚が広がっている各々の点に (en chaque point auquel notre perception s'étend) 実際に存在しているのです (M411)。

堅固な自己定位の中心がまずあって、そこからさまざまな事物を知覚することで、次第に自分が生きる世界を広げて行く。私たちは普段、素朴にそう思っている。だが、上で確認した三つの視点はいずれもそうした中心を前提としていない。むしろ最後の引用が示すとおり、バルクソンにとって最初に認めるべきものは広大な知覚的拡がりであって、自己中心的な「ここ」は、その後で獲得される、二次的なものに過ぎないのである。

最後に決定的なテキストを引いておこう。

私の身体とは、これらの知覚の中心に現れるものである。私の人格とは、これらの行動を関係付けるべき存在である。このように、子供がやるとおり、また直接的経験と常識が私たちを誘うとおりに、表象の周辺から中心へと進むなら、事態はおのずから明らかになる (MM46)。

驚くべきことにバルクソンは、以上にみてきたような視点を「常識」と呼

ぶだけでなく、「子供」のそれと等置しているのである。たしかに子供の、とりわけ幼児期の知覚が「非人称的である」(MM46)ことはよく知られている。しかし、私たち「大人」(MM30)にとって、事情は異なるだろう。ベルクソンが述べるのとは逆に、まずあるのは絶対的な中心としての「ここ」であって、それを基準として、あれこれの事物が「そこ」に見える——これこそ語の通常の意味での常識ではないだろうか。

### 3 『物質と記憶』の知覚論

こうした異常知覚を解明するための予備的考察として、『物質と記憶』の知覚論の検討に移ろう。確認したいのは、ベルクソンにおける情動と知覚の区別、またそれぞれに対応する時間的距離と視覚的距離の区別である。

#### 3.1 情動 (affection)

まずは情動から。ここまでベルクソンが語るいくつかの知覚の光景の異常性を強調してきたが、彼が正常な知覚経験を全く看過しているのかといえば、もちろんそうではない。むしろ、ある地点まで、『物質と記憶』の知覚論は非常に（言葉の通常の意味で）常識的であると言っても良いほどである。日常的な知覚の光景を的確に描写するテキストを、第一章から引用しよう。

ところで、私の身体が、周囲の対象に現実的で新しい作用を及ぼしうる一対象であるとすれば、それは諸対象に対してある特権的な位置を占めているはずだ。……実際、私の観察によれば、外的対象の大きさや形、そして色さえも、私がそれに近付くか遠ざかるかによって変化する。匂いの強さや音の強さも、距離に応じて増減する。また最後に、距離そのものが、とりわけ、周囲のさまざまな物体が、言ってみれば、私の身体の直接的な行動から護られ

ているその程度を表しているのである。私の視界 (horizon) が広がれば広がるほど、私を取り巻くさまざまなイメージは、より一様な背景 (fond) の上に現れ、私の関心を惹かないものになっていくように思われる。私がこの視界を狭めるほど、それが囲っているさまざまな対象は、私の身体がそれらに触ったり動かししたりするその容易さの多寡 (plus ou moins grande facilité) にしたがって、明確な区別を持って配置されるようになる。それゆえ、それらは、私の身体に対して、鏡のように、生じるかもしれない私の身体の影響を送り返している。つまり、それらは私の身体の支配力の増減 (puissances croissantes ou décroissantes) に応じて配置されている。私の身体をとりまく諸対象はそれらに対する私の身体の可能な行動を反射 (réfléchir) しているのである (MM15-16)。

ここにみられる、「反射」という考え方のうちに、ベルクソンにおける第一の、そして素朴な距離についての理解を看取することができる<sup>12</sup>。

いま私の目の前にあるマグカップを例にとろう。カップが手元にあるとき、私はすぐにそれをつかみ、中にあるコーヒーを飲むことができる。こうした場合、対象への「私の身体の支配力」は非常に大きく、また対象と身体との距離は短かく感じられるだろう。だが、私が席を立ちカップを視野に入れつつ後方へと退いて行けば、その支配力は徐々に小さくなっていく。このように、対象と身体の間で感じられる距離の長さは、対象への身体の支配力の大きさに反比例する、というわけだ。

だがそもそも、ベルクソンの知覚論の枠組みにおいて、こうした事態はいかにして可能になっているのだろうか。

この問いについての一定の応答を見出すことができるのは、知覚論が表立って展開される『物質と記憶』の第一章ではなく、第二章における身体による再認の議論である<sup>13</sup>。

対象を用いる習慣は……運動と知覚とを一緒に組織するに至る。とすれば、反射的に (à la manière d'un réflex) 知覚に引き続く、そうした生まれつつある運動についての意識が……再認の基礎をなしていることになるだろう (MM101)<sup>14</sup>。

「生まれつつある運動」とは、身体の内部の運動、具体的には、習慣的に組織された一連の筋肉運動であり、それについての意識とは、そうした筋肉における運動感覚である。また『物質と記憶』において、身体の内部感覚は、一般に「情動 (affection)」と呼ばれる。それゆえ、ここで議論されている身体による再認は、情動によって可能になると言うことができるだろう。

しかしこう述べると、バルクソンの読者には、次のような疑問が浮かぶかもしれない。同書第一章において、知覚と情動は対比的に、それぞれ順に、身体の可能的行動と現実的行動との関係で語られる。とすれば、外的知覚における可能的行動の反射が情動によって可能になるという解釈は、テキストと逆のことを言っているのではないか、という疑問である。

この点を明確にするため、まず、情動に、感情 (sentiment) と感覚 (sensation) という下位区分を設けたい<sup>15</sup>。両者はともに身体に由来するものだが、少なくとも、身体の内部における局所性の有無、そしてまたそれぞれが担う機能によって区別される。一方の感覚は、程度の差はあるものの、身体の特定の場所に局所化され (例えば「歯痛」(MM57))、身体の現実的な行動を表現するという機能を持つ。他方の感情は、そのような局所性を持たず、知覚経験に自動的に付随し漠然と感じられるものである<sup>16</sup>。可能的行動の反射という機能は、このうちの後者、すなわち感情としての情動が担うものである。

次に、反射概念についても簡単に確認しておこう。「対象は……可能的行動を反射する」という表現において、反射が起こる鏡面に譬えられてい

るのは外的対象（例えば、マグカップ）の表面であるが、このことを厳密に考えてみたい。鏡の前で自分の姿が見えるという現象を物理的に考えると、鏡面で反射した光が知覚者の網膜に到達するというのが直近のプロセスであるが、その手前に、身体の前表面で光が反射するというプロセスがあることに注意しよう。このことを念頭に置いて、鏡を外的対象に置き換えてみると、身体における光の反射の手前に、さらに外的対象自体が身体に向けて光を発するというプロセスがあることがわかるだろう<sup>17</sup>。まとめると、(a) 対象から身体（網膜その他）への光の放出、(b) 身体における反射反応、(c) 対象表面における身体の可能的行動の「見かけ上の反射」(MM43) の三つのプロセスが存在することになる<sup>18</sup>。

さて、こうした反射の機能によって可能となる、空間知覚の時間的な側面をベルクソンは以下のように定式化している。

行動が時間を支配するのに正確に比例して知覚は空間を支配する (*la perception dispose de l'espace dans l'exacte proportion où l'action dispose du temps*) (MM29).

私の足下から一定方向に（例えばいま私がいる部屋のドアに向かって）想像上の直線をひいてみるとしよう。すると、この線上の各点に位置する諸対象（ないし床面）は、私がそれらに対して行動するのに（あるいはその場所に移動するのに）必要な時間の印象を与えていることがわかるだろう。同じことは知覚される空間のあらゆる方向についても言えるため、行動に要する時間の長さによって秩序付けられた、身体を中心に同心円（ないし球）状に広がる時間構造が得られることになる。これが上の定式が述べている行動の時間と空間の知覚の比例関係だ。以下では、このように行動の時間との関係によって規定される距離を時間的距離と、またこうした時間構造を持つ空間を行動空間と、それぞれ呼ぶことにしたい<sup>19</sup>。

この行動空間について注意すべきは、次の三点である<sup>20</sup>。

第一に、この空間の中心に置かれる身体は、「数学的な点ではない」(MM57)。通常「ここ」と指示される、自分の身体のある場所は、一定の拡がりを持っている。このことが意味するのは、そうして指示される場所が、一様に時間的距離を欠いているという事態である。

第二に、行動空間における時間的距離の規定について。確認したとおり、日常的な対象への身体の支配力の大きさないし「行動の強度」(MM27)は、身体から対象までの距離の長さに反比例する。逆に言えば、行動空間における(時間的)距離は行動の時間と比例関係にある。では、その強度や時間的距離の大小は、正確には何によって規定されているのだろうか。

この点について『物質と記憶』はほとんど何も述べていないので、『試論』第一章の「筋肉の努力」についての議論(DI 15-20)を参照したい。そこでのベルクソンの主張をまとめるとこうだ。通常、「努力の感情」というものは、身体の一点に局所化され、増えたり減ったりする、と考えられている。しかし例えば「徐々に拳を握りしめる」とき、実際に感じられているのは手の中の何かの増大ではなく、その行為に随伴する筋肉の運動の「面積の増大」だということがわかる。つまり、努力の感情の強度の大小は、その働きに關与する「身体的面積」の大小に還元されるというわけだ。

ところで、すでに述べたとおり、反射を可能にする感情としての情動とは、より正確に言えば、組織された一連の筋肉感覚のことである。とすれば、情動に由来する行動の強度もまた、それに関与する筋肉の面積の大小によって規定されると言うことができるだろう。身体から遠くの対象に比べ、近くにある対象の方が行動の強度が大きく、そしてまた時間的距離が短く感じられるのは、後者の方が前者よりも影響を与える身体の面積が大きいからなのである。

第三に、行動空間の無際限性について。実際に知覚されている空間に、

上述のような時間構造が認められるという点についてはもう良いだろう。だが私たちは、知覚されている「部屋」の「壁の向こう」に、「隣り合った部屋」や「家の残りの部分」、さらには「通り」や「街」(MM158)等々が際限なく広がっていることを——具体的に想起することなく——暗黙裏に知っている。では、こうした事態はいかにして可能になっているのだろうか。この問いに対する応答は、『物質と記憶』第三章、逆円錐図に通じる議論が展開される箇所に見出すことができる。

……空間における距離は、時間における脅威ないし見込みの近さの指標となっている。それゆえ、空間は私たちに、私たちの近未来についての図式を一挙に与える。そして、その未来は無際限に流れることになる以上、未来を象徴する空間は、その不動性において、無際限に開かれたままであるという特性を持つ。ここから、私たちの知覚に直接与えられている視野 (horizon) は、必然的に、より広く、知覚されてはいないが存在する円環に囲まれているように私たちには思われ、その円環はそれ自体で、自身を取り囲む別の円環を伴っており、同様のことは無際限に言える、ということが帰結する。したがって、私たちの知覚にとって本質的なのは、私たちの現実の知覚がつねに、延長を持つ限りにおいて、より広大で無際限でさえあり、また私たちの知覚を含むような経験に対する「内容」でしかない、ということである。そしてその経験は、知覚される視野を超出するために、私たちの意識には欠けているのだが、それでもなお現実的に与えられているように思われる (MM160, 強調引用者)。

導出関係に注意しよう。確認したとおり、行動の時間と時間的距離の間には厳密な比例関係がある。それゆえ、関係項の一方である時間 (「未来」) の無際限性を認めれば、もう一方の項である距離もまた、無際限であることが帰結する、というわけだ。

### 3.2 知覚 (perception)

以上にみた情動に由来する時間的距離についての考え方は、哲学的にも、また日常の経験に照らしても、常識的なものだと言えるだろう。しかし『物質と記憶』における距離の概念は、これに尽きるものではない。というのもベルクソンは、情動を知覚から明確に区別し、知覚はそれだけで距離の印象を与えると主張しているからだ (MM241-242<sup>21</sup>)。この点についての理解を得るには、情動を欠いた知覚についてのベルクソンの見解を参照すれば良いだろう<sup>22</sup>。そこで、先天的な盲人が手術によって視覚<sup>23</sup>を回復した直後に得られる光景について、「外的知覚」の講義録をみていきたい。

白内障の手術を受けた生まれつきの盲人が、それまで通常は触れることで再認してきた対象を初めて見て区別し名指すことができるということが確かめられたなら、たとえそれがただ一度の観察であったとしても、その事例は決定的なものとなるはずである。それ以外のすべての事例では異なっていたとしても、その相違は患者の置かれた例外的な条件に由来しているのかもしれないからだ。さて、フランツ<sup>24</sup>が今世紀半ばに行った観察のなかにこの種の実事<sup>25</sup>がすでに存在する。患者は初めて見た時に丸みを帯びた (arrondi) 対象と角張った (anguleux) 対象を区別していた。そしてまた最近の観察も、この点については必ずしも決定的なものではないが、少なくとも三次元空間の直接的知覚をもっともらしいものと見做すことを許している (CII326, 強調引用者)。

これと反対の立場、つまり視覚に三次元の拡がりの知覚を一切認めない立場に対して、ベルクソンはいくつもの反証を挙げているが、その基礎にあるのは、知覚そのものとその測定を区別するという考えである<sup>25</sup>。

私たちが、三次元空間の、視覚による直接的な直観を持っていることには疑いの余地がないように思われる。ところで、スコットランド学派の後天的な視覚の理論から取り上げるべき確かなこと、それは、視覚には、距離を測定することも体積を構成する三つの次元の間の正確な数学的関係を決定することもできない、ということである。そうした測定は、対象に向かう私たちの身体の運動や、対象に沿った私たちの四肢の運動によってのみなされる。したがって、眼が私たちに奥行きや距離の差異の知覚を与えるにとどまるのに対して、それを測定するのは触覚なのである（CII326-327）。

視覚と触覚——知覚と情動——が上手く組み合わせられていない開眼者が正確な距離を報告できなかったとしても、そのことから距離が知覚されていないということは決して帰結しない。いかに漠然としたものであったとしても、情動に還元されない距離が存在するからだ。以下ではこの意味での距離を、時間的距離から区別して、視覚的距離と呼ぶことにしたい。もっとも、日常的な生活においては「より有用な認識が……そうでない認識にとって代わる」ことは「心理学における法則」（CII327）である以上、正常な経験、すなわち、二つの系——知覚と情動——が首尾よく組み合わせられた状態で機能している経験においては、時間的距離が視覚的距離に対して優位にある。しかしだからといって、前者は後者を消去してしまうわけではない。正常な経験においても、時間的距離の下に、いわば重ね書きされた状態で、視覚的距離が伏在しているのである。

#### 4 異常知覚の解明

以上を前提として、第2節で確認した三つのタイプの異常知覚がいかにして生じるのか、その発生機序をみていきたい。

正常な知覚経験において、視覚的距離と時間的距離は重ね合わされた状態で与えられる。例えば、私がいま居る部屋のドアを見るとすれば、ドア

という対象は視覚的に一定の距離だけ離れたものとして知覚されると同時に、そこに辿り着くまでに一定の時間がかかるものとして感じられる。しかし、こうした経験は必ずしも自明のものではない。

……私たちが現在の現実について持っている具体的な感情は、実際、それによって私たちの体が自然に刺激に反応する効力を持った運動についての意識に他ならない。だからこそ、感覚と運動の関係が弛緩したり損なわれたりすると、現実感は弱まったり消え失せたりするのである (MM195)。

脳内で機能的ないし器質的な障害が発生すると、知覚に重ねられていた情動は減衰ないし消失し、周囲のさまざまな対象は慣れ親しんだ行為の相関者としては感じられなくなってしまう。そうした状態において、人はしばしば「知覚される事物があたかもその奥行き (relief) や硬さ (solidité) を失ったかのようなだった」(MM195) などと語ることになる。こうした感覚と運動の解離、すなわち情動と知覚の解離について、以下の二点に注目したい。

第一に、こうした場合に経験される「非現実感 (non-réalité)」には、時間的距離の減衰が伴うという点、行為相関的な時間感覚としての「ここ」と「そこ」の区別は曖昧となり、前者は日常的な知覚経験の絶対的な原点としての地位を失うことになるだろう。

第二に、視覚的距離の残存について、視覚的な距離の「測定」を行うのが情動である以上、このような状態に置かれた人は、目の前のさまざまな対象の遠近を正確に言い当てることはできないだろう。しかしそれでも、視覚的な拮りは、漠然とした遠近を保持したまま確かに残っている。病理的な状態に陥った人が「奥行き」の喪失を語るとしても、それは、時間的な距離がもたらす奥行きであって視覚的なそれではない。

以上を念頭に、第2節で確認した異常な知覚の経験の発生機序をみてい

こう。先の引用部でベルクソンは、知覚と情動の解離<sup>26</sup>に程度を設けているが、この程度の存在によって、異常知覚の三つの特徴、すなわち俯瞰・没入・拡散を、それぞれ説明してみたい。

まず、俯瞰的な視点について。これは先に取り上げた視点のなかでは、比較的正常な知覚に近いものであるように思われる。というのも、この視点においては、知覚の対象と主体の間の時間的な距離が残存しているからだ。本来であれば、身体が位置する場所であるはずの時間構造の中心が、身体の背後へとズレるために、自己の身体が一定の距離だけ離れた場所から知覚されることになってしまう、それだけのことに過ぎない<sup>27</sup>。とはいえもちろん、そうしたズレの存在によって、知覚に重ねられる情動の量、すなわち可能的行動の反射の強度は全体的に弱まるため、知覚される光景は現実感を失い、遠くにある星や雲と同じように、ただ一様な「背景(fond)」(MM15)として眺められることになるのである。

対象没入的な視点は、この情動と知覚の解離の極限として、つまり情動なき知覚として、理解することができるだろう。だが、この視点において、対象が「自分の身体が占めるのと全く同様の資格において知覚」されるという事態は、どのように説明されうるのだろうか。

この点についての理解を得るため、まずは、通常の経験において、自己の身体の内部が「ここ」として感じられるのはいかにしてか、ということについて考えてみよう。重要なのは、情動における感情と感覚の区別である。確認したとおり、正常な状態において、行動空間の時間構造を可能にしているのは、正確に言えば、「感情」としての情動であった。それゆえ、通常の経験において、身体が「ここ」として経験されるとき、それは感情だけで可能になっているように思われるかもしれない。しかし、ただ行動の空間が与えられただけでは、その内のどこが経験されているのかまでは規定され得ない。そうした局所化は、「感覚」としての情動によってなされる(MM154)。要するに、(感情の不在によって)時間的距離がゼロで

あり、かつ（感覚によって）局所化される場所に、日常的な意味での「ここ」という経験が与えられる、というわけだ。

こうした考えを、対象没入的な視点に適用してみよう。まず、対象のある場所において時間的距離がゼロという条件が満たされている、という点は良いだろう。経験の局所化という条件はどうだろうか。もちろん、この視点において感覚は与えられていない。しかし、それに代わるものとして知覚が存在し、これは感覚と同じように（漠然とではあるが）視覚的距離によって局所化される。加えて、ベルクソンが感覚と知覚とに等しく「拡がり」を認めていたことに注意しよう（MM243）。正常な経験において、自己の身体の内部が局所化された拡がりを持った状態で「ここ」として経験されるのと同様に、対象没入的な視点においては、知覚されている表面が拡がりを持ちまた局所化された状態で与えられるからこそ、知覚者は「自分自身」を、対象がある場所において、「自分の身体が占めるのと全く同様の資格において知覚する」（強調引用者）ことができるのだ。

拡散的な視点についてもほぼ同じように考えることができる。没入的な視点においては知覚の対象が特定されていたが、今度はそうした限定すら消失してしまうと考えてはどうだろうか。この点については、『持続と同時性』のテキストが非常に示唆的である。

私は私の意識にとってひとつにもふたつにもなるような、二つの流れを「同時的」と呼ぶが、私の意識は、ひとつの不可分な注意（attention）の働きが好ましい場合には、それらを一緒に（ensemble）、ただひとつの流れとして知覚し、反対に、それらに注意を割り振る方が好ましい場合にはその間それらを区別する、そして注意を分配するがしかし二つに分けるのではない場合にはこれらのことを一緒にやってのけたりさえするのである（DS49-50<sup>29</sup>）。

ここにみられる「注意」の働きの特異性を指摘したい。『物質と記憶』に

は、第三章で導入される「生への注意」、そして第二章後半部が扱う「注意的再認」という二つの注意概念がある。前者は、これまでの議論を踏まえるなら、情動の反射機能にかかわるものとして理解を許すものであり、後者は（本稿の範囲外であるが）記憶の現実化と関連するものとしてひとまずは理解されるものである。だが引用部にみられる注意概念は、これらのいずれとも異なって、ただ視覚だけに関係しているように思われる。窓越しに街を眺めるとき、私は、散歩中の犬に注意を向けることも、その犬が遊んでいる公園に注意を向けることも、街全体をただ漠然と眺めることもできる。これは日常的な経験の例であるが、情動から完全に切り離れた知覚において、同様のことが起こるとすれば、視野の全体に自らが拡散していくような経験が得られるだろう。

第2節で扱った異常知覚についての解釈は以上のとおりだが、最後に一点、本稿の立場を明確にしておくべき論点がある。それは、『物質と記憶』第一章における「イマージュの総体」の身分である。というのも、私たちの実際の知覚はこの「総体」の部分でしかありえないはずだが、にもかかわらずベルクソンは、それが「与えられる」と繰り返しているからだ。では知覚されないその総体は、何によって与えられるのか。ここで記憶の働きを持ち出すことができない以上、情動によって、と言う他ないだろう。だがそうだとすると、いかにしてか。

この点を明らかにするため、まずは先に指摘した行動空間の無際限性を想起して欲しい。そこで引用したテキストが置かれていたのは、『物質と記憶』第三章で最初に提示される図1 (MM159) の直線 AB を説明する文脈であり、先に時間構造の無際限性と呼んだものは、この直線 AB のそれに相当するものである。この図において CI は、時系列的に並べられた過去の記憶、点 I は「私たちの意識に実際に (actuellement) 与えられている唯一のもの」と定義されている。これらを踏まえて、そのすぐ後で提示される図2 (MM169) に目を移すと、図1における点 I は、図2におい

バルクソンにおける知覚の諸相

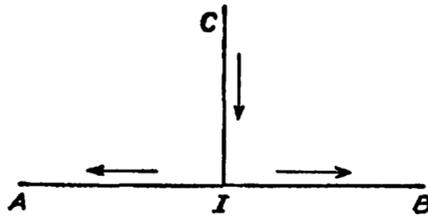


図 1

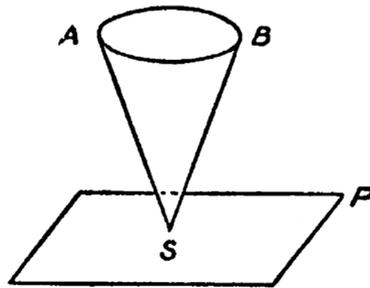


図 2

て、「宇宙についての私の現実的な (actuelle) 表象としての動的平面 P」へと拡張されていることがわかる (ここで S は身体を表している)。ではこの図 2 において、図 1 における直線 AB に相当するものはどこへ行ってしまったのだろうか。それは、この平面 P を部分として含みつつ<sup>30</sup>、P を越えてその外部へ無際限に広がる「宇宙」そのものとして理解できるはずだ。バルクソンはこの「宇宙」を、平面と区別して「断面」と呼んでいるように思われる。

……実在そのもの (réalité même) としての生成のこの連続の中で、現在の瞬間というのは、流れていく流体 (masse) に私たちの知覚が行うほとんど一瞬の切断 (coupe quasi-instantanée que notre perception pratique) から成るものであり、この断面 (coupe) こそまさに私たちが物質的世界と呼ぶものな

のだ。私たちの身体はその中心を占めている。それは、この物質的世界の中で、私たちがその流れを直接感じられる部分なのである（MM154）。

ここに見られる「断面」<sup>31</sup>や「物質的世界」、そして「宇宙」などのタームはみな、『物質と記憶』第一章における「イマージュの総体」の同義語として理解できるものである。また、「生成」や「流体」という言葉が指示しているのは、存在の最下層に位置づけられる「物質」のことだ。私たちの身体は、その物質の只中で、知覚される領域を切り開き、そうして切り取られた平面に対して、情動が構成する行動空間を被せることによって、知覚の拡がりという地の上に、行動の対象という図を浮き出させると同時に、見ることができない平面の外部を感じ取る。要するに、イマージュの総体は、情動によって与えられ、その一部が知覚によって意識されるのである<sup>32</sup>。

## おわりに

これまでみてきた異常知覚は、『物質と記憶』の实在論の枠組みにおいてどのような身分を持っているのか、この点について確認して議論を終えることにしよう。第1節では、同書第一章における「常識」の水準が、第四章の方法論が語る「経験の曲がり角」と見做され、「有用なもの」の手前に想定される「直接的なもの」について、記憶を排した水準という暫定的な解釈が与えられた。しかし「直接的なもの」へ到達するには、実際には、もうひとつ別の要素を排除する必要があったのである。それが行動の空間を構成する情動であり、「有用なもの」から純化された「直接的なもの」とは、記憶のみならず情動をも排した知覚のことだったのだ。だがこれは、語の通常の意味での常識的な観点から同書を読み進めた場合、見失われてしまうことだろう。というのも、正常な経験においては、知覚と情動の結びつきはほとんど絶対的なものであり、情動に由来する行動の空間

がつねにすでに知覚を覆っているために、双方の寄与分を見極めることが事実上不可能となってしまうからだ。本稿が問題化した異常な知覚の存在は、こうした絶対性を棄却するものとして、特権的な地位を持つ。知覚と情動という二つのシステムの重なりには、程度があり、あるときは二つの系の原点にズレが生じたり（俯瞰）、またあるときは一方が他方から完全に切り離されてしまうことといったことも起こりうる（没入、拡散）。だから、情動は、知覚の可能性の条件ではあり得ない。このことは、超越論哲学との関係では次のように言い換えられるだろう。ベルクソンによれば、カントにおける「現象の多様」は、その内に「拡がりを持つ傾向のある漠然とした塊（*masse confuse à tendance extensive*）」を含んでいる。しかし、空間を私たち人間の感性のア・プリオリな形式として理解してしまえば、この形式に先だって与えられるものは何もない以上、「手前に」想定される「漠然とした塊」は捉えられない。この困難を解消するためにベルクソンは、カント的な空間概念を、本稿が行動空間と呼んだものに書き換えたのである。このことによって、「私たちは、ある程度まで、拡がりから離れることなく空間から抜け出ることができる」（MM208）ようになる。ある程度まで、というのは、たとえ行動の空間を排除したとしても、知覚そのものが、物質から切り取られるひとつの平面であるために、その中心に据えられる身体という視点に相対的な側面を持っているからである。ただし、このいわば準・純粹知覚（*quasi-pure perception*）<sup>34</sup>とでもいうべき状態においては、時間的距離はもちろん、知覚される対象の馴染み深さ、さらには身体に対する諸対象の方向付けに至るまで、行動空間に由来するものが一切欠けている。ベルクソンが「動的連続」（MM221）と呼ぶのはこうした水準のことであり、しばしば用いられる「万華鏡」の比喩もこのような状態——方向を欠いていて、漠然とした形は存在するが、それも回転させれば色のモザイクと化してしまう——を指すものとして理解されるべきである。そしてこのような仕方では、「直接的

なもの」として純化された知覚というシステム、円錐が切り開く平面Pこそ、ベルクソンが「人間的経験の黎明をつげる曙光 (naissante lueur)」と呼んだものだろう<sup>33</sup>。それゆえ、残る課題は、この平面を構成するために導入される二つの操作——空間的な「分割」と時間的な「凝縮」——の機序を解明し、行動＝作用のスケールを複数化することであり、これが達成されるとき、さまざまな階層における存在者のそれぞれに固有の活動の「舞台 (théâtre)」(MM17, 264) が認められ、議論の始めには認識論的な身分しかもたなかったイマージュの総体にも、私たち人間にとっての世界という、明確に存在論的な規定が与えられることになるのである。実際、『物質と記憶』の最初の序文は、こう締めくくられている。

このようにして定義される哲学は、直観に与えられたものへの意識的かつ反省された復帰に他ならない。それは事実の分析と諸説の比較を通じて、私たちを常識の帰結に連れ戻すはずである<sup>35,36</sup>。

## 註

<sup>1</sup> 本稿は、杉山直樹氏の講演「直観哲学を再考する——現象学の前で」(2014年6月22日、上智大学哲学学会大会)の二つの主題、「今」と「ここ」のうち、後者の内容を受けるものであり、以下で扱われる奇妙な視点の存在は、そこですでに指摘されていたものである。同講演の趣旨は、現象学的な「今」・「ここ」の概念がベルクソン哲学の立場からみると自明ではないということ、フッサールからデリダに至るまでのさまざまな論者に触れつつ、大局的な観点から示すというものであった。本稿の主眼は、その奇妙な視点が『物質と記憶』の内部で、どのような意義を持ち、またいかにして説明されるのか、これらの点の解明にある。

<sup>2</sup> ベルクソンの著作からの引用と参照指示は、慣例にしたがい、末尾の文献表記載の略記号の後、現行のカドリージュ版の頁数を示すことによって行った。原著者による強調にも引用者による強調にも一様に傍点を用いたが、後者の場合は断りを入れた(動詞を単独で並記した場合は、適宜原形に直してある)。なお邦訳に際して参照した既訳も末尾の文献表にあげたが、必要に応じて(場

合によっては大幅に) 変更を加えている。

- <sup>3</sup> ベルクソンの読者であれば、これは「権利上」想定される「純粹知覚」についての記述であって、一定の記憶の介入を前提とせざるをえない私たちの具体的な知覚経験についての記述ではないのではないかと、疑問に思われるかもしれない (cf. PM82-82)。しかし、たとえこうした記述の多くが純粹知覚が語られる文脈で見出され、そしてその下で主客の「部分的合致」(MM246) が語られるとしても、ベルクソンがこうした光景を常識的だと繰り返し強調している以上、この種の知覚は、記憶の介入を認めた上でも可能でなければならぬだろう。そのため本稿では、純粹知覚論に頼らずに、そうした知覚が「事実上」どのように成立するのかを問題にしたい。
- <sup>4</sup> 「通常の意味での」常識というとき、本稿で念頭に置かれているのは、『知覚の現象学』において、メルロ＝ポンティが「身体空間」の概念を提起する際に提示した一連の議論である。もちろん、ベルクソンが『物質と記憶』の第一章において「常識」の観点を強調したのは、第七版序文が註釈するとおり、実在論(デカルト)と観念論(パークリ)の不毛な対立を回避し、哲学者である以前に人間である私たちに共通の感覚(sens commun)から議論を開始しようという意図があつたことであるが、本稿の主張は、そうして語られる常識の光景が、実際には、通常の意味での常識のそれと一致しないのではないかと、いうものである。
- <sup>5</sup> ここで検討している箇所は、ちょうど『物質と記憶』が一冊の著作として出版される以前に論文として公刊されたヴァリエーション「知覚と物質」の冒頭部に対応している。同書がどのような順序で書かれたか、その年代推定は、資料の不足から容易ではないが、少なくとも当時の読者は第一章に先だつてこの部分を読むことができたということを強調しておきたい。
- <sup>6</sup> ベルクソンはプロティノスに倣って、知覚の働きを、彫刻の比喩を用いて語ることもある (PM102 等)。『物質と記憶』でも頻出の coupe (r) や découper, tailler といった語郡もこの論点にかかわるものとして読めるだろう。
- <sup>7</sup> 感覚質の凝縮、身体的習慣、そして純粹記憶の現実化の三つのうち、ここで問題としているのは最後の論点にかかわる意味での記憶である。
- <sup>8</sup> Cf. MM213, 215, 219.
- <sup>9</sup> Cornibert [2012] (p. 26) は、『物質と記憶』の第四章と第一章の方法論上の独自性を強調しているが、本稿は、少なくともここで述べた方法の消極的側面は二つの章において共有されている、と考える点でそうした解釈とは対立する。

- <sup>10</sup> 身体についての同様の表現は他に、MM14-16, 19, 36 等。
- <sup>11</sup> Riquier [2004] (p. 279) が「観照者 (spectateur)」と呼ぶものは、この視点に近いように思われる。
- <sup>12</sup> もちろん、この反射の機能は、本論が問題とする時間的距離の構成だけにかかわるわけではない。とりわけ重要な論点として、因果的秩序や数種の秩序と身体による再認の関係については、杉山 [2006]、第二章第二節を参照。以下に示す知覚経験の具体例においてももちろん、そうした秩序の認識は成立している（「カップ」という種類の対象の認知等）が、本稿では、議論の都合上、そうした事柄を主題的には取り上げない。
- <sup>13</sup> ここで「運動図式」を主題化しないのが意外に思われるかもしれないが、それは、この概念が知覚と情動の二つのシステムに同時にかかわるため、それらの区別を問題化する本稿にとっては取り扱いが難しいように思われたからである。
- <sup>14</sup> もちろんここで問題となっているのは、神経系を介した反射反応であって、第一章において知覚を光の反射に譬える場面が直接指示されているわけではない。しかし事柄としては、これらの箇所において同じ機能が問題となっている、というのが本稿の解釈である。
- <sup>15</sup> 『物質と記憶』第一章の冒頭では、情動が「感情ないし感覚という形で」(MM12) 与えられると述べられている。
- <sup>16</sup> 『物質と記憶』第二章は、対象を知覚する際の運動感覚によって「〈見たことがある〉という感情 (sentiment du « déjà vu »)」(MM97) を説明している。
- <sup>17</sup> このことは、ベルクソンが外的対象をイマージュと呼び、具体例として光点を用いる理由のひとつであるように思われる。
- <sup>18</sup> ここでは情動による反射だけを問題にしているが、これは実際には、知覚的な対象の分割と相補的である。つまり、ここにあげた三つのプロセスがあるとき、情動による反射は、厳密には、(c) のプロセスのことであるが、これに対応する (a) のプロセスにおける光（ないし作用）それ自身が「知覚」として規定されるのである。情動でなく知覚の観点からみた反射については、平井 [2005]（とくに p. 51）を参照。
- <sup>19</sup> これと同型の距離および空間概念は、Merleau-Ponty [1945] (p. 281 et seq.) にも見出すことができる。なお知覚経験をめぐるベルクソンとメルロ＝ポンティの対照は別の機会に譲るが、少なくとも『知覚の現象学』における距離や奥行き (profondeur) の概念は、本稿における時間的距離に尽くされると言うことができるだろう。

- <sup>20</sup> 本来であれば、知覚経験における「方向」および知覚対象の「分割」というさらに二つの観点から、この空間を特徴付ける必要があるが、紙幅の都合のため、別の機会に譲ることにしたい。なお、これらの点も含め、ここに示した解釈は、Heidsieck [1957] (pp. 52-63) が指摘するベルクソンにおける「空間の質的な側面」を最大限に強調するものと言えるだろう。
- <sup>21</sup> この箇所でもさまざまな論拠が提示されているが、それらは主に記憶との関係で視覚的知覚の独自性を明らかにしようとするものであり、知覚と情動の関係を問題化する本稿の主旨には合致しないため、ここでは『講義録』から『物質と記憶』と内容上重なる部分を参照した。
- <sup>22</sup> 開眼事例を参照することについては、Jankélévitch [1959] (p. 108) から示唆を得た。
- <sup>23</sup> 本稿において基本的に視覚と知覚は同義語であるが、情動の混入がないことを強調する場合、知覚ではなく視覚の語を用いている。
- <sup>24</sup> この症例を含め開眼者の視覚経験については、鳥居 [2000] が詳しい（現代の知見との対照は別の機会に譲る）。
- <sup>25</sup> Janet [1879] (p. 9) はちょうど開眼事例を解釈しつつ、「知覚」とその「評価 (appréciation)」を区分しているが、ここでのベルクソンはおそらくこの区分を引き継いでいると思われる。
- <sup>26</sup> 引用部 (MM195) の註でベルクソン自身が指示している文献 (« Visions, a Personal narrative » in *Journal of mental science*, 1896, p. 284) から、本稿における俯瞰視点に近い経験の記述を引いておく。「私は〈視覚 (vision)〉という言葉で、物質的な具体性を欠いた光景を目にしたときの感覚を表現するために用いる。そうした光景は、いつも私の心に、それが私の目によって照らされたさまざまな眺めであるかのような印象だけを与えた。それはまるで魔法のランタンによって照らされた光景のようであったが、想像の努力によってよく憶えている場所や人のイメージを赴くままに想起するときと同じように、不自然なところや驚くようなところは全くなかった」。なお事柄としては、柴山 [2007] が定義する離隔 (detachment) の症状が、ここで挙げた異常知覚に最も近いものであるように思われる。同書は、夢ないし記憶との関連でのみベルクソンの理論を取り上げているが、柴山による「眼差しとしての私」と「存在者としての私」という区分は、ベルクソンにおける知覚と情動の区分に非常に近い。本稿が問題にする異常知覚の区分、俯瞰・没入・拡散のいずれも、解離性障害における離隔症状という観点から考えればむしろ典型的なものであるように思われる。

- <sup>27</sup> もちろん実際には自分の背中や後頭部の視覚は与えられないので、より正確には、私は「私の身体」を背後から見ている感じがすると言うべきだろう。
- <sup>28</sup> 平井 [2006] (p. 114) は、反射による知覚の編成（本稿註 19 を参照）やそれに伴う身体の内部と外部の境界画定に、身体の現実的行動の認識である情動が先行し、後者が前者の条件となっていると指摘している。このことは、本稿の枠組みでは、情動の反射機能による行動空間の発生と対応付けられるように思われる。
- <sup>29</sup> この一文もまた「私は～を…と呼ぶ (J'appelle…～)」という表現で始まっている。
- <sup>30</sup> 「平面 P (plan P)」という表現だけからは、もちろん、この平面が限定されているのかどうかは判断できない。だが、ここでベルクソンがこの平面を「私の表象」と呼んでいること、そしてまた「意識の諸平面」が語られる際、その「平面」は、円錐の「断面」として限定されていることを併せて考えるなら、平面 P が限定されたものとも考えることも許されるだろう。
- <sup>31</sup> 同様の表現は、MM81, 165, 166, 169, 237 等。
- <sup>32</sup> Cornibert [2012] は、行動する身体の極限（潜在的行動の消失）としての「私」に対してイメージの総体が与えられると指摘しているが、本稿は、日常的な経験においてもイメージの総体が（行動空間によって）与えられると主張する点で、彼の解釈を斥ける。
- <sup>33</sup> 他の用例 (cf. MM167, 279) から、この光 (lueur) という語を、人間を含むさまざまな存在者が、その種に適した水準を構成する際の、断面ないし平面を指示するものとして理解したい。
- <sup>34</sup> 情動を含まないが、(感覚質の凝縮にかかわる) 記憶を含むという意味でこの語を用いている。なお、「ほとんど瞬間的な (quasi-instantané)」(MM154, 169, 234 等) という表現が、一定の持続の厚みを含意し、その意味で凝縮としての記憶（本稿註 7 を参照）を含意することに注意されたい。
- <sup>35</sup> 『物質と記憶』初版から第六版までの序文の末尾。現行のカドリージュ版の Lectures (p. 445) 所収のものを参照した。
- <sup>36</sup> 本稿の第 2 節から第 4 節の内容は、2014 年の若手哲学者フォーラムでの口頭発表を基にしたものである。また本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

## 文 献 表

### ベルクソンの著作

- Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2007, (DI)  
*Matière et mémoire*, PUF, 2008, (MM)  
*Durée et simultanéité*, PUF, 2009, (DS)  
*La pensée et le mouvant*, PUF, 2009, (PM)  
*Cours II*, éd. par H. Hude et als., PUF, 1992(CII)  
*Cours de psychologie*, éd. par S. Matton, SÉHA, 2008  
*Mélanges*, PUF, 1972, (M)

### 参照した邦訳

- 合田正人・平井靖史訳 [2002], 『意識に直接与えられたものについての試論』, 筑摩書房  
田島節夫訳 [2001], 『物質と記憶』, 白水社  
花田圭介・加藤精司訳 [2001], 『持続と同時性』, 白水社  
原章二訳 [2013], 『思考と動き』, 平凡社  
合田正人・谷口博史訳 [2000], 『ベルクソン講義録 II 美学講義／道徳学・心理学・形而上学講義』, 法政大学出版局

### ベルクソン以外の著作と論文

- Renaud Barbaras [1998], *Le tournant de l'expérience. Recherches sur la philosophie de Merleau-Ponty*, J. Vrin  
Renaud Barbaras [2006], *Le désir et la distance. Introduction à une phénoménologie de la perception*, Deuxième édition, J. Vrin  
Nicolas Cornibert [2012], *Image et Matière. Étude sur la notion d'image dans Matière et mémoire de Bergson*, Harmattan  
Gilles Deleuze [1983], *Cinéma I L'image-mouvement*, Les édition de minuit  
François Heidsieck [1957], *Bergson et la notion d'espace*, Le cercle du livre  
Paul Janet [1879], « De la perception visuelle de la distance » in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, janv 1879, pp. 1-17  
Vladimir Jankélévitch [1959], *Henri Bergson*, Quadrige, PUF  
Maurice Merleau-Ponty [1945], *Phénoménologie de la perception*, Gallimard  
Camille Riquier [2004], « Y a-t-il une réduction phénoménologique dan *Matière et*

*mémoire?* » in *Annales bergsoniennes II*, PUF

Frédéric Worms [1997], *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF

柴山雅俊 [2007], 『解離性障害』, 筑摩書房

杉山直樹 [2006], 『ベルクソン 聴診する経験論』, 創文社

鳥居修晃・望月登志子 [2000], 『先天盲開眼者の視覚世界』, 東京大学出版会

平井靖史 [2005], 「イメージ, 知覚のラディカルな外在主義」, 『哲学誌』第47号, 東京都立大学哲学会

平井靖史 [2006], 「イメージのもうひとつの〈内〉」, 『哲学の探求』第33号, 哲学若手研究者フォーラム